文部科学大臣賞

「使い捨て」なんてもう言えない

市川高等学校　１年　早川　友理

中学一年生の時、私は家でリラックスしながらネットニュースを読んでいた。そこである記事に目が留まった。使用済みの使い捨てカイロから水質改善のキューブが作れ、その材料である使用済みカイロが不足しているため寄付を募っているという内容だった。

数日前に使用したカイロをゴミ箱へ入れる時に、何か再利用できないのかと思いながら捨てていたので、寄付したいと思った。私は寒がりなのでカイロが必需品、クラスメイトにもカイロの大量消費者がいた。

コロナ元年ということもあり、クラスメイトと協力してできることに制限があった中、使用済みカイロを集め、寄付するという活動なら出来るのではないかと考え、友人に声をかけ担任の先生の協力を得ながらクラスの活動として始めることができた。そこからこの活動は学年、そして学校全体の活動となった。共に活動を続けてくれる仲間に恵まれ、この活動を通して様々な経験をすることができ、私の世界は広がった。その中でも他校のボランティア活動をしている人たちとの交流会はとても刺激的だった。交流会を通じて他校の仲間も増え、この活動がもっと広まっていくのを感じた。

中学一年生の時から始め今年で４年目、最初は 14 kgだった寄付も 150 kgまで増えた。本来なら可燃ごみとして捨てられてしまう使用済みカイロだが、それを再利用することでごみの削減につながるうえ、水質改善になる。可燃ごみが減ることで焼却時に出される温室効果ガスの削減にもなり、環境保全に良いことばかりだ。このような小さな活動でも地球にとって少しでも良い効果があるのなら継続していくべきだと思う。

環境先進国と言われるスウェーデンでは、ごみの 96％はリサイクルされ、他国からも可燃ごみを輸入しているという。しかし、その逆の国も存在しており、リサイクルという概念がなく、他国からの支援によりリサイクルを行っている。その支援に日本も携わっているが、まだ日本のリサイクル事業はやれる事があるのではないか。

例えば私も行っている使用済みのカイロの回収は地域社会全体で行えばより沢山のキューブを生産することができる。できたキューブを国内だけではなく海外に輸出することで世界中の水を綺麗にすることができるかもしれない。今までそのまま捨ててきていた過去があるから面倒だと思う人も多いだろう。しかし、そのことで地球にダメージを与えるということを意識して動かなくてはいけない時代が来ている。

一人一人の意識の変化で地球の未来は変わる。一つのごみから広がる世界、それは気づく人によって多種多様なのだと思う。お茶がらやだしがらを農作物の肥料にしたり、着物制作時に出る布の切れ端でつまみ細工を作ったり、野菜の皮や切れ端を利用したスープを作ったりと、捨てる前に再利用できないのかを考え調べる。消費者だけでなく生産者も商品に再利用方法を記載するなどの工夫ができるだろう。

小さなことからコツコツと。そういうことができる人が増えると、きっと良い変化が起きる。そのごみを「使い捨て」と言わずに、再利用できないか考え行動することを未来につなげていく必要があると思う。